

# 体育・スポーツのユニバーサルデザイン に関する基礎的研究

田 中 愛

## 1. はじめに

### 1. 1. 研究目的

本研究の目的は、これまでのスポーツ教育及びスポーツを教材とする教科体育の学習目標の変遷を踏まえ、体育・スポーツのユニバーサルデザインの実現に向けた基礎的研究を行うことである。本稿の背景として特に検討を加えたいのは、競技スポーツにおける勝利至上主義と、教科体育において技能の習得を重視する立場（以下、「技能中心主義」とする）についてである。これらの検討をもとに、両者を乗り越えるスポーツ実践のあり方の一つとして、アダプテッド・スポーツの教育的意義を模索する。

本論の構成は次の通りである。まず、スポーツにおける過度な競争主義（勝利至上主義）や、義務教育段階の教科体育における技能中心主義がどのように受け止められ、どのように批判されてきたかを概観する。次に、その批判を受け、新たなスポーツ・体育の在り方を探る潮流について検討を加える。これらの検討をもとに、アダプテッド・スポーツを用いたスポーツのユニバーサルデザインについて現象学的に考察し、実践の一部を紹介する。

### 1. 2. 研究の背景

近代スポーツは競争原理なしには成立し得ないと言えるだろう。この競争原理は、チャンピオンスポーツへの高い動機付けとして、あるいは一般的な教育手段としても不可欠である。また、どんなレベルのスポーツ実践であっても、競争的な側面が全く無いスポーツを想像することは難しい。しかし、「競争的であるこ

と」は容易にエスカレートし、プレイヤーの心身へ悪影響を及ぼすという理由から、批判を受けることがある。競争がエスカレートした結果、一部には体罰やドーピングのような問題が生じることが指摘されている。

例えば日本において、勝つために過酷な練習やしごき、体罰にさえ耐えなければならぬという価値観が広く共有されたきっかけの一つに、1964年東京オリンピックにおける「東洋の魔女」の金メダル獲得を上げることができよう。彼女たちが「東洋の魔女」となるために不可避であったのが、監督である大松博文氏の過酷な練習であった<sup>1</sup>。大松の体罰を伴うしごきは、当初は大変な批判にさらされたとのことであったが、「東洋の魔女」が各種の世界大会に勝ち続けることによって、その評価は劇的に変化することとなる。『スポーツする身体とジェンダー』の著者谷口は、大松氏の回想録を取り上げ次のように述べる。

まさに、「勝てば官軍、負ければ賊軍」といった劇的変化だったと大松は解雇する。しかしこうした変化を、単に「勝った」という事実だけによるスパルタ指導の正当化とみるべきではないだろう。むしろ、試合のなかでの選手たちの必死のプレーや勝利の瞬間の歓喜などが見る人にも共有される中で、「スポーツとはこうあるべきなのだ」という実感となって浸透していったのではなかろうか。(中略)。スポーツの場では直接的な身体感覚のレベルで妥当性が受け入れられてしまうために、それは一層強固なものとして浸透していった<sup>2</sup>。

彼の指導スタイルや指導者－選手関係はその後、女子バレーボール界のみならずスポーツ界に共通する価値観形成に大きく影響を与えたことは想像に難くない。谷口も述べるように、「特に東京オリンピック以降、世界の中の日本という意識

<sup>1</sup> 産業社会学者の新は著書『「東洋の魔女」論』において、大松の過酷なしごきの根底に「女性的身体の克服」という発想を読み取り、次のように述べる。「大松は、スポーツの遂行にあたって、マイナスとなる身体を徹底的に消去しようとした。彼はバレーボールを、女性的身体を保護するものとしてでなく、克服するものとして位置づけたのである」(新雅史(2013)『「東洋の魔女」論』東京、イースト新書、p.186.)

<sup>2</sup> 谷口雅子(2007)『スポーツする身体とジェンダー』東京、青弓社、p.126.

とそのなかでの上昇志向がスポーツ場面で可視化されていく。そして、スポーツを通して共有される感動や一体感によって、そこでの規範や価値観が肯定的に受け止められていったのである<sup>3</sup>。しかし、過度なしごきや体罰は必ずしも優れた選手を育てるとは限らず、むしろ重大な事件・事故を引き起こしており、当然のことながら戦後20年当時の価値観を受け入れることはもはや許されない。

そのことを示す記憶に新しい出来事としては、日本代表選手を含む女子柔道選手15人が暴力行為やパワーハラスメントを告発した事例が挙げられよう。この問題を取り上げているスポーツ社会学者の溝口は「日本の柔道界には、体罰を容認する文化が根強く残っている」<sup>4</sup>と明言している。その背景には「戦中、「思想善導」政策の一環として使われ、軍事教練などの素地となった」<sup>5</sup>こと、その慣行が戦後まで受け継がれてきたことがあると指摘する。溝口の指摘からは、近代スポーツの競争原理とは別に、それと併存する形で日本固有の「道」の教育的な精神が体罰を助長していると観ることもできる。このことに関連して、『野球を学問する』を著した桑田真澄ほかも、「野球道」を表すキーワードとして「練習量の重視」「精神の鍛錬」「絶対服従」を挙げ<sup>6</sup>、次のように語っている。

小学生のときから、グラウンドに言っただけで殴られない日はありませんでした。つねに監督やコーチ、先輩に殴られていた。ただ小学生だと、まだ知識もないし、考える力もないので、「野球ってこんなもんなのかな」と思っていました。<sup>7</sup>

以上、勝利至上主義の背景と現状を見れば、競争それ自身がエスカレートしやすい構造を有していることと日本独自の教育的な精神が相俟って、ひずみが複雑化しやすいことがわかる。先の桑田氏が回想するように、選手自身が自分の意志で判断、決定する力が付かないままに選手としてのキャリアを積むこともまた、

<sup>3</sup> 谷口 (2007) 同上書. p.135.

<sup>4</sup> 溝口紀子 (2013) 『性と柔一女子柔道史から問う』東京、河出ブックス. p.87.

<sup>5</sup> 溝口 (2013) 同上書. p.88.

<sup>6</sup> 桑田真澄, 平田竹男 (2010) 『野球を学問する』東京、新潮社. p.68.

<sup>7</sup> 桑田ほか (2010) 同上書. p.56.

問題点の1つであろう。また、勝利至上主義のもとでは、当然のことながら弱い者はスポーツ実践から排除されていくことになる。スポーツ「実践」の世界は、次第に一握りの強い者のみが享受しうる排他的な世界となっていくのである。

このようなひずみを修正すべく今後どのような理念を掲げるべきかについて、日本のスポーツ教育は岐路に立たされていることがわかる。次項では、スポーツを教材とした教育の営みとして教科体育に焦点を移し考察したい。

## 2. 教科体育の教育目標

### 2. 1. 学校体育における技能中心主義批判

教科体育の目的・目標の変遷については、高橋によれば、文部省(当時)「学習指導要領」に掲げられる学習目標は、1958年改訂の際に国家の定める「基準」として強制力を持ち始めたようだ<sup>8</sup>。そしてその内容も、「基礎的運動能力」や「運動技能」が主たるものとして強調されるようになった。高橋はこのきっかけの一つに競技スポーツからの強い要請があったことを指摘する。すなわち、「日本の国際スポーツへの復帰、オリンピックでの惨敗(1952年ヘルシンキ大会(夏季)を指すものと思われる)、日本人選手の基礎体力の低下をめぐる論議、東京オリンピック誘致と選手強化体制づくりなどの現象が、学校体育における基礎体力やスポーツの基礎技能の育成という課題を浮き上がらせた(括弧内は引用者による)」<sup>9</sup>。その後の成果は前項にも見たとおり、1964年東京オリンピックでのメダル増加に間接的であれつなごったようであるが、その後いわゆる「体力づくり体育」は行き詰まりを見せ、批判の対象ともなっていく。戦前の軍事教練に対する反省はもちろんのこと、例えば体育学者の浅井は1967年には既に次のように述べている。

基礎技術の訓練を尊重する人たちは、ややもすると技術練習が体育の中心学習であるかのように考えがちであるが、この考えは狭隘ではなからうか。学

<sup>8</sup> 竹田清彦, 高橋健夫, 岡出美則(1997)『体育科教育学の探求—体育授業づくりの基礎理論』東京, 大修館書店. p.20.

<sup>9</sup> 竹田清彦ほか(1997)同上書. pp.20-21.

習は広く有機体が新しい事態に適応し反応する体制の形成過程であって、その体制は身体的適応だけを意味するものではない。この意味で、体育の学習は技術の学習だけではない。それ以外に知的に反応して理解を成立させ、新しい事態に応じて情緒を変容し、環境に応じて行動を変化させている一切が体育の学習である。<sup>10</sup>

ということである。このような批判を受け、1977年及び1988年の改訂において、体育科では「運動の楽しさ」重視の方針が取られることとなる。『体育授業の目標と評価』の編著者木原によれば、2008年改訂学習指導要領にもこの方針は引き継がれ、小学校学習指導要領改訂と2010年指導要録改訂では「運動の技能」と「運動の楽しさ」と「運動の学び方」を関係づける目標と評価へと展開し現在に至っている<sup>11</sup>。体育分野には「運動に関する領域」と「知識に関する領域」が設定され、その運動領域の中にさらに「技能」「態度」「知識、思考・判断」という項目が置かれている<sup>12</sup>ことから、技能はあくまでも学習の一部分でしかないといえられていることがわかる。このように、多少の振れ幅は認められるものの、特に学校における教科体育では、理念としては「技能中心主義」と異なる方向へと舵を切って進んでいる。

しかし、それでもなお、「体育授業に良い思い出がない」と語る人はいる。ここではその理由を考えてみたい。日々の授業を観察すれば、例えば生徒たちは、ボールが与えられれば投げ方や蹴り方、打ち方を試し、より正確に、より遠くへ投げられるようになるにはどうすればよいかを遊びながら工夫し始める。仲間が巧みにボールを操っていれば、自分も同じように操れるよう試しはじめる。この時、指導要領のいわゆる「技能を身に付ける」ことは、自発的に目指されることである。現に、今までできなかったことができるようになることは、子どもにとっても、教師にとっても嬉しい瞬間である。

<sup>10</sup> 浅井浅一(1967)『運動遊戯集団の構造と機能:小集団と人間関係の分析』大阪, 日本辞書, p.19.

<sup>11</sup> 木原誠一郎編著(2014)『体育授業の目標と評価』広島, 広島大学出版会, pp.17-36.

<sup>12</sup> 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説保健体育編』京都, 東山書房, p.23.

実際、何かが「できるようになっていく」ことは、一概に批判されてはならない、体育にとって重要な学習の内容を含んでいることも確かである。技能中心主義を批判する立場の教師であっても、体育授業においては、スポーツなどの身体運動を通じて参加者に何らかの価値のある体験をさせたいと考えるだろう。その場合、「参加者がどのように身体運動を行うか」ということが最大の焦点とならざるを得ない。「どのように身体運動を行うか」は、究極的には技能と切り離すことが不可能である。このことについて体育学研究者の前川は、運動技能の学習の意義を以下のように述べている。

子どもたちは、身体活動または、運動技能の学習過程において、さまざまな人間関係を経験するのであって、運動技能の学習においては人間関係的学習場面を「同時」にもっているとみなしなければならない。<sup>13</sup>

そうであれば技能は、これまでに批判されてきた文脈とは異なる視点から重視されていた可能性も見落としてはならないということである。さらには「運動技能の上達は学習者にとって、なによりもたいせつな目標となろう。学習者はまず技能の上達をめざし、それが達成されるとき、情緒的な満足をうる。」<sup>14</sup>ということである。

このように、ある技が「できたかーできなかったか」は授業参加者の関心の中心となる。ただし、ここで最も慎重に吟味しなければならないことは、少しずつできるようになっていく無数の過程がある、ということと、「できたかーできなかったか」という単純な二分法による結果は、全く別問題だということである。時間をかけて練習してもできるようにならない生徒は、「できない」ことによってそれまでの練習の過程を見過ごしてしまう。できるようにするための学びのプロセスに価値を見出せなくなってしまうのである。この点こそが、指導要領改訂だけでは解決することが難しい「技能中心主義」の実情なのである。技能において

<sup>13</sup> 前川峯雄 (1982) 『体育学の原点』東京、不昧堂、p.93.

<sup>14</sup> 前川 (1982) 同上書、p.96.

映像化や数値化が容易な「できる－できない」、「上手－下手」という点のみを評価の対象とされてしまった結果、「技能重視」の体育授業では子どもたちのさまざまな個性や学習の過程が見落とされることになる。つまり、技術重視の体育授業が批判される背景には、ひとつの技術を「できたか、できなかったか」の二分法によって学習の成果が評価されてしまうということが挙げられる。

「少しずつできるようになっていく」無数の過程があるにも関わらず、それが見落とされている、ということは十分批判に値するであろう。さらには、体育授業で重視すべきことは技能の習得ではなく、それ以上の何らかの価値である、という主張がなされている。これは「人間形成論」としてこれまでも主張されてきた視点である。

## 2. 2. 技術の習得を越える価値

「スポーツと人間」の著者グルーペは、スポーツの教育的側面に触れて以下のように述べる。

スポーツ、プレイ、運動における、またそれらを通しての陶冶は、身体的育成以上の、またいろいろなスポーツができるようになりスポーツの能力が増大する以上のものでなければならぬし、流行するスポーツ傾向を追いかけたり、また運動市場で今まさに供給されるものを選択する以上のものでなければならぬ。それは、スポーツ独自の行為連関、意味連関や状況のなかで、自己形成、世界習得、そのために必要でかつそれと連結する身体的－スポーツ的、社会的、情緒的前提という、教育的目的をともなったプレイ、競技、訓練、練習として、体験や経験を伝達し加工することを目指している。<sup>15</sup>

このようにグルーペは、スポーツを教育に用いる際には、「身体的育成」や「スポーツ的能力の増大」を前提としながらも、「〇〇ができた」という技術の習得以

<sup>15</sup> グルーペ, O. 永島博正・岡出美則・市場俊之・瀧澤文雄・有賀郁敏・越川茂樹訳 (2004) 『スポーツと人間－文化的・教育的・倫理的側面』京都, 世界思想社, p.101.

上の価値を求めていると言えよう。

また、「学校体育の人文主義的方向」を探る論考を多く著している阿部も、学校体育の有用性の論理を認めつつも、それだけでは不十分であり、むしろ不毛であると主張する。阿部によれば学校体育の本質は人間形成なのであり、

運動技能しかみえない体育、成果や出来映えしかみえない体育、そしてそれによって子供たちの人間的価値をはかろうとする体育、そのような体育は教育としての健全さにおいて一考を要する。<sup>16</sup>

ということである。「こんなことができるようになって何の得があるのか。」という生徒からの素朴な問いかけに対して、「身に付けておけば役に立つ。」という有用性の論理を持ち出すことは、生徒を納得させる有効な回答となり、授業を進める教師としては楽な主張なのである。しかし、阿部の言うように、このような有用性の論理だけでは、学校体育が生徒それぞれに秘めた可能性や個性を無視することになりかねない。

では、阿部の示す人文主義的方向としての「生成」がどういうことであるのか、また、グルーベの述べる「身体的育成以上の、またいろいろなスポーツができるようになりスポーツ的能力が増大する以上のもの」とは何であるのか、その内実を探る必要がある。

### 2.3. 創造的スポーツ実践の必要性

前項までに見てきたように、競技スポーツおよび教科体育では、技能習得や勝利を過度に求めることなく、それ以上の価値を見出すべきことが指摘されている。競争的スポーツとは全く異なるスポーツの在り方を模索することは、難しい課題ではあるが、スポーツ教育に課された現代的な課題であると言えよう。「競争が過度になることを自制するシステム」の一つのモデルとして、Eichberg

---

<sup>16</sup> 阿部悟郎 (2008) 「学校体育論議の一方—有用性の論理を越えて—」『体育・スポーツ哲学研究』30 (2), pp.127-142, p.140.



らの sports for all に関する研究並びに「デモクラシー」の概念が有効である。彼らはデンマークの伝統遊びの観察を通して、モダンスポーツとは異なるデモクラシクなスポーツの在り方について記述している。これは、スポーツが、一部のエリートスポーツに限られている現状を批判し、スポーツの新たな在り方について考察した示唆的な先行研究と言える。彼らは、bodily democracy という独自の概念によって sports for all の概念を規定し直すことを試みている。その新しい理念とは、「エリートスポーツの、ある低いレベルへの単なるコピーではな」<sup>17</sup>く、そして、「人々が彼ら自身のシステムに従ってプレイし、自己決定し、他者に出会い、他者を認める」<sup>18</sup>ことである。この先行研究は、近代スポーツとは異なる、それと併存し得るもう一つの在り方をしたスポーツを生み出すが必要である、ということを示唆している。本研究では、このような新しいスポーツの見方に対し、さらに「身体多様性」という視点を加えたいと考えている。すなわち、動的で、可塑的(しなやか)、そして可能性を秘めた身体的能力という見方に基づいたスポーツ実践の可能性を考察する。

### 3. スポーツのユニバーサルデザイン

#### 3. 1. ユニバーサルデザイン

スポーツについての発想の転換のためには、排他的でない「インクルーシブなスポーツ」の可能性を探る必要がある。本研究では、従来の「インクルーシブなスポーツ」と区別するため「ユニバーサルスポーツ」という概念について検討する。「ユニバーサリティ」とは、文字通り、「普遍的な」ことである。誰もが参加できることはしかし、勝敗を決着しなければよい、というのではなく、また、技術的な難しさを排し、簡単なことだけをプレイすればよいわけでもない。体力的に劣っていたとしても、ゲームの駆け引きや複雑な面白さを求めていれば、「簡単な」ゲームはすぐに飽きてしまうだろう。教育的な観点から、とくに日本では、

<sup>17</sup> Eichberg, H. (2011) *Bodily democracy: towards a philosophy of sport for all.* Routledge, London, p.321.

<sup>18</sup> Eichberg, H. (2011) *ibid.* p.321.

シンプルで簡単なゲームが学校の教材として提案されているが、しかし、本研究では、「ユニバーサルスポーツ」は、それらのゲームとも別の位置づけである。なぜなら、「シンプルさ」や「簡単さ」は、一般的にゲームをつまらなくさせ、達成や成長という感覚が失われているため、それらのゲームを長く楽しむことが難しくからである。従来のインクルーシブなスポーツと同様、体力に限界のある人や高齢の人々の参加機会について言及するのだが、体力や障がいの有無、年齢の高低を越えた「身体の多様性」を射程に入れたスポーツ実践の在り方を探るための語として使用していく。

また、社会学的な指摘として、西山は「近代」の人間観への批判から生じた「ユニバーサル・デザイン」について述べている。

ユニバーサル・デザインとは、通常デザインの目標とされる「普通の人」という対象の虚構性を批判することから生まれる。なぜならこの「普通の人」という言葉は、奇妙なことにしばしば男性で、背は低すぎず高すぎず、太っても痩せてもいなくて、健康で、精神的にも安定しているといった、めったに存在しない人間のことを指しているのであって、本当の意味で普通の人間を意味していないからである。この「普通の人」という虚構が世間でも根強く信じられているために、よくも悪くも体の不自由な人は特別扱いされてしまうのだが、ユニバーサル・デザインでは現実に存在する人々が多様な属性をもつことを前提に設計が行われる。<sup>19</sup>

「近代スポーツ」もまた、この「普通の人」という幻想をもとに発展してきたと言える。普通でない人は対象外であったために、スポーツ実践で言えば、身体的に何らかの弱さを抱えている人は、そもそも（近代）スポーツ実践の対象外であった。

「ユニバーサルスポーツ」の探求には、以下の議論が必要となるだろう。

- 1) 何がユニバーサルスポーツの実現を阻害しているか

---

<sup>19</sup> 西山哲郎 (2006) 『近代スポーツ文化とはなにか』 京都, 世界思想社. pp.146-147.

2) 身体の高様性ととはなにか

3) ユニバーサルティを実現する方法はあるか？

より多くの人々がスポーツの魅力とその本質を知るためには、より多くの人々が参加できる「ユニバーサルスポーツ」の理念を考察し、具体化する必要がある。また、その考察の際には、特に「身体の高様性」が鍵概念となることも同様に示唆されている。

### 3. 2. 何がユニバーサルスポーツの実現を阻害しているか

ここで、ユニバーサルスポーツと他の類似するスポーツ、すなわち、「スポーツ・フォー・オール」と「インクルーシブスポーツ」との違いについて述べておきたい。スポーツ・フォー・オールには、健康の保持増進を主目的とした、「すべての人に」スポーツをさせる政策的意味合いがある。したがって、多くの人の健康・体力という意味では必ずしも「スポーツ」である必要はなく、むしろトレーニング等のより広い身体活動を含むスローガンであると言えよう。したがって、本研究で問題としている「スポーツ」とは別の意義を有していると考えなければならない。

また、「インクルーシブスポーツ」では、いわゆる健常者と障がい者が一緒にスポーツすることが目標となる。この目標は本研究のテーマであるユニバーサルスポーツ以上に長い歴史を有し、その価値は十分に周知されているが、しかし不十分な点も指摘できる。それは、インクルーシブスポーツの背景にある「健常者—障がい者」という枠組みの強固さである。すなわち、この二項対立によって、却って参加者個人間の差異、つまり、健常者の間の差異、障がい者の間の差異が見過されている点である。したがって、先に西山が述べた「ユニバーサル・デザイン」のように、誰にも参加する権利のある「開かれた」スポーツが必要なのである。

さて、大学生のスポーツ観の一例として、田中は大学生による以下のようなコメントを紹介している<sup>20</sup>。「運動能力がないから他の人の足を引っ張ってしまう。」、「バレーやバスケットはチームメイトに迷惑をかけてしまったら…とどうして

<sup>20</sup> 田中愛 (2012) 「スポーツにおける「競争」の意味：「教養としてのスポーツ実践」のための一試論」『武蔵大学人文学会雑誌』44 (1・2), pp.343-356, p.345.

も思ってしまういきゅうくつな気持ちを感じてしまう。」「自分自身があまりスポーツをしないので遠いもののように思えます。むしろ、スポーツは見るものという意識があります。(下線は筆者による)」

スポーツにおける過度な競争性の一番の問題は、技術の欠如や弱さ、年齢、そしてバーンアウト症候群などの理由によって人々がスポーツを自ら実践しなくなるということである。言い換えれば、勝利至上主義の中では、「勝てない」プレイヤーは競争から排除されることになる。そして、多くの人々が、プレイヤーではなく観客としてスポーツを楽しむこととなる。しかし、それはスポーツ界にとって問題を多くはらむと言える。例えば、プレイする人が限られるということは、プレイすること自体に独自の楽しさを知る人が限られるということであり、スポーツの将来的な発展が止まることさえ危惧される。「観るスポーツ」の楽しさがあり得るが、「観ること」の背景には、そのスポーツを構成する運動についての実感すなわち共感が必要となる。「観る」ことをより深く楽しむためにも「する」という体験が豊富である必要がある。別の観点から指摘される問題として、スポーツを「プレイすること」から離れることによって、人々がさまざまな身体的能力を伸ばす機会を失うということも危惧される。

さらに、人々のスポーツ実践への参加の有無が、「物的身体的な能力」の有無・高低によって決定づけられてしまう理由を次のように推察することができる。すなわち、身体能力に対する見方が、身長や筋力など、物的身体的な能力にのみ重きが置かれている、ということである。従って、柔軟で可能性を秘めている「見えにくい」身体能力に対して正当な評価が下されていないということである。もしも、その身体能力の「見えにくい」側面が実践者によって理解されれば、たとえ物的身体的な能力が劣っている場合でも、スポーツ参加への動機付けは十分に可能である。

### 3. 3. 身体の多様性とは何か？

近年では、「身体障がい」という多様性への認識は、アダプテッド・スポーツの普及によって発展が見られる。しかし、アダプテッド・スポーツにおいても、パ

オリンピックにおいてはスポーツの高度な競技化によって、オリンピックスポーツと同様にドーピング問題が生じている。つまりアダプテッド・スポーツそのものは競技化する可能性が十分にあるし、現に高度な競技となっている種目もあるため、ユニバーサリティの実現とは分けて考える必要がある。

このことを示す例として、バレーボールは、ジャンプを伴うために下半身に障害を持つ人にとっては危険が大きく、「物理的に」エクスクルーシブなスポーツである。そのためにアダプテッドされた種目である「シッティングバレーボール」では、座ってプレイするために、形式的には「ユニバーサル」なスポーツということになる。しかし、障害の有無に関わらず初めて参加するプレイヤーは、たとえどこにも障害を持っていなくとも、ほとんど何もプレイできないのである。そのため、実質的にはやはりシッティングバレーでさえ「エクスクルーシブ」なのである。つまり、ここでわれわれが議論を前進させるために必要なことは、物理的な障害の有無を相対化しようとするのではなく、むしろ、どのような身体的特性をもつプレイヤーであっても、そのスポーツと調和しうまく対応できる方法を模索することである。

物的側面を超えた議論を進めるためには、先述したように、柔軟で可能性を秘めている「見えにくい」身体能力にアプローチすることが有効である。我々の身体は実に多様である。たとえば、それまでの運動経験や生育環境なども、「身体」を多様にする要因として考慮されるべきであろう。その際、現象学的身体論は、物としての形にとどまらない身体のはたらきを詳細に捉えているという点で、ユニバーサリティの実現に必要な議論である。身体の空間性についてメルロ＝ポンティは、「身体の空間性とは、身体の身体的存在の展開であり、身体が自己を身体として実現するその実現仕方である」<sup>21</sup>と述べる。だからこそ、身体は柔軟に変化することができる、ということである。また現象学者の市川は、「身体空間」に関して次のように記述している。

---

<sup>21</sup> メルロ＝ポンティ, M. 竹内芳郎・小木貞孝訳 (1967)『知覚の現象学 I』東京, みすず書房. p.248.

それはほとんど体表とかさなるもっとも安定した生得的身体空間から、体表をこえてひろがる比較的安定した準固定的身体空間、さらにはそのひろがりがかたえず流動する不確定な可変的身体空間にいたる変化層をもち、かつそれらをたえず重層的に統合している。<sup>22</sup>

この身体の柔軟性について田中は現象学的身体論に拠りながら、義足を自分の足のように使っているスプリンターの「義足が自分の足そのものである」という表現や、目に障がいを持つ人の「白杖がその人の目である」という表現が、単なる比喩ではないことを指摘し、さらに次のように考察する。

スポーツ実践において身体のひろがり、道具としての物だけでなく、補助者にまで及ぶ可能性が示唆される。その例として、ボッチャという競技が挙げられる。この種目の選手においては、車いすに座りながら投球のコントロールを競っている。自らの手による投球が難しい場合はスロープ状の補助器具を用いるが、スロープの傾きをミリ単位で調節し、スロープを支える補助者に的確な指示を出すことによって、自由に意図を実現しようとしている。この例からは、道具だけでなく、補助者さえも「意味の上では」選手の実践の一部になっていることがわかる。<sup>23</sup>

さらに、物的身体の多様性から、「能力としての身体」へ目を転じれば、物的身体の多様性とは逆に、どんな身体であれ、共通して「成長可能性」を持っているということが見出される。「身体の多様性」は、この柔軟で可能性を秘めた「成長可能性」に由来する。

<sup>22</sup> 市川浩 (1992) 『精神としての身体』東京、講談社学術文庫、p.77.

<sup>23</sup> 田中愛 (2016) 「スポーツ身体論の現象学的考察—アダプテッド・スポーツ実践に生じる「意味」としての身体に着目して—」『体育・スポーツ哲学研究』38 (1), pp.37-50, p.47.

### 3. 4. ユニバーサルティの実現可能性

最後に、ユニバーサルスポーツの実現に向けた試みの可能性について触れたい。ルールや形式が固定されたスポーツを「閉じられたスポーツ」とするならば、この試みは「開かれたスポーツ」をデザインすることを狙っている。それはまた、身体の高多様性、可塑性、可能性という見方に基づいている。参加者の身体に応じて変化することできる「開かれたスポーツ」を、「今—ここ」にいる参加者によって作り上げる、という方法があり得るのではないだろうか。

例えば、「目隠しをして歩く」体験から、視覚に頼らずに歩けるようになる「可能性」を理解する。練習を重ねた参加者は、音だけでなく、空気の流れ（風）、人の気配（温度）などにも敏感となり、正確に歩き、走ることができるようになっていく。例えば、「壁に近づくと空気が止まっているように感じる」、「振動する床を足の裏で感じる」などのコメントがある。

このような「身体の高多様性」への理解をもとに「目隠しをするスポーツ」をデザインするほか、シッティングバレーボールの体験によって、座って動くことのできる「可能性」を理解し、その理解をもとに「座ってするスポーツ」をデザインする、などの活動も有効であろう。これらの実践においては、スポーツをデザインするとともに、参加者の身体もそれに応じて新たな能力を得ていく、ということが目指される。

さらにこの“デザイン”の過程で参加者は、スポーツ実践に必要となる「道具」や「空間」、「動き方の種類」の3つに関して、新しいものを作ろうと試みる。その際になかなかうまく行かない、その試行錯誤の中で、よりふさわしい道具はなにか、どの広さが一番面白いのか、どんな動きが可能かということ、まさに「身体で」考え工夫することとなる。この、なるべく多くの身体状況の人たちが参加できるように工夫している活動からは、先行研究に示したEichbergらの言うデモクラシーの可能性を見ることが出来る。そういった意味で、単なる既存のアダプテッド・スポーツを体験するだけでなく、自分たちの工夫で種目を作り上げることには、「身体の高多様性」に関して、そしてスポーツの高多様性に関して一定の学びが生じるのだと考えられる。以下の表が、大学体育で実施する場合の実施計画

の一例である。

表：授業実践例：大学体育

回	内容	場所
1	ガイダンス	教室
2	講義・グループピング	教室
3, 4, 5, 6	体験1 アイマスク	体育館
7, 8, 9	体験2 風船バレー、シッティングバレー	体育館
10	振り返り	教室
11, 12, 13	種目づくり	体育館
14	発表会	体育館

#### 4. おわりに

スポーツへのかかわり方は、「する」だけでなく、「観る」、「支える」など多様化していると言われて久しい。しかし、そうであっても「する」ことがスポーツとのかかわりの核であることに変わりはない。人はスポーツを「する」ことによって、自らの身体を知り、他者と出会うことができる。時には思い通りにならない身体と葛藤し、別の時にはその可能性の大きさに気づくこともある。だからこそ、スポーツは教育の中で長く「心と身体を育てる」役割を担ってきたと言える。

しかし、学校体育の授業で、技能の習得を、「できたーできなかった」という評価に留める限り、その教育効果は半減するだろう。そして、スポーツの、高度に競技化した側面だけが注目され続けることによって、多くの人がスポーツを「する」ことをやめてしまう。

それゆえに、より多くの人々がスポーツを「する」ことができるよう、スポーツの多様性を模索することは今後ますます必要となるだろう。「開かれたスポーツ」に近い実践は特に大学体育で数多く行われているが、「ユニバーサルスポーツ」の前提となっている「身体多様性への理解」をまず学習者に促す「基礎づくり」の部分が欠けているように思う。ここで例示した取り組みも、未完成の学習プログラムであるため、今後さらに検討を進めていきたい。また今後の展望として、スポーツのユニバーサルデザインの過程が、既存のスポーツ実践と並存する形の



Democratic Sportとして位置づく可能性を検討したいと考えている。

### 【謝辞および付記】

本研究は、科学研究費補助金（若手研究B「ユニバーサルスポーツの理論及び学習プログラムの構築とその評価法の確立」課題番号15K21420）及び平成27年度武蔵大学特別研究員制度による助成を受けて行われた。記して感謝の意を表したい。

